

「移動する子どもたち」の ことばの教育学 —子どもから大人まで—

川上 郁雄
早稲田大学
Dr. Ikuo Kawakami
Prof., Waseda University

1

1. 「移動する子どもたち」の時代

- 「移民の時代」(Castles & Miller, 2009)
- 人々は仕事を、富を、安全を求め、地球規模に東西南北を移動している。
- その結果、幼少期から移動する子ども、**複数言語環境で育つ子ども**が増加している。

2

シドニーで出会った高校生

- さゆり…東京生まれ。中学を卒業して、一家で「豪州移住」。
- ジェニー…豪州生まれ。幼少時に来日。10年以上、日本暮らし。日本語堪能。
- ミカ…日本生まれ、ロンドン育ち。日本のインターナショナル校を経由して豪州へ
- キム…在日コリアン3世。英語を学ぶために単身で来豪。

3

2. 本講演のテーマ

- (1) 「移動する子どもたち」をどう捉えるか
- (2) 「移動する子どもたち」の「ことばの学び」をどう考えるか
- (3) 「移動する子どもたち」の「ことばの教育」をどう考えるか

4

3. 先行研究 その1

- 『アメリカで育つ日本の子どもたち—バイリンガルの光と影』(佐藤郡衛ほか編、2008)
- この本の中で、片岡裕子「アメリカには日本国籍、アメリカ国籍、二重国籍の子ども、日系アメリカ人や国際結婚家庭の子どもなど、多様な「日本人」の子どもがいる」「日本国籍を持たなくても「日本人」と思う子どももいる」
- →「日本の子ども」とは誰か。定義の見直しを提起。

5

3. 先行研究 その2

- 同書で、佐藤郡衛は「これらの多様な子どもたちを「第三の文化」を持つ子ども(Third Culture Kids)と捉えること」を提起。
↓
「混淆的なアイデンティティをもつ「新しい」日本人」を支える枠組みの構想を、指摘。

6

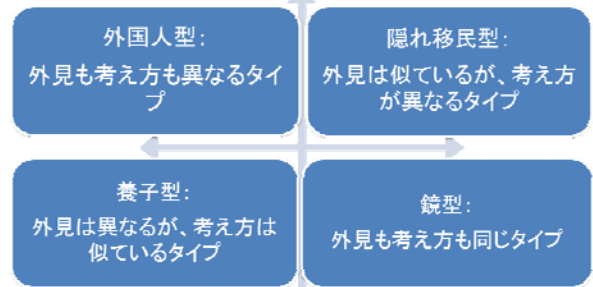
3. 先行研究 その3

- 「**第三の文化**」をもつ子ども(Third Culture Kids: 以下、**TCK**)の議論(1950年代から)。TCKとは、
「**成長期の重要な時期を親の文化の外で過ごした人である**」(Pollock & Van Reken, 1999)
- 背景: 世界各地のエリート層のアメリカ人子弟
アメリカ本土育ちの子どもと異なる様子

7

TCKの4つのタイプ

TCKと自分を取り囲む主流文化との関係性



Pollock & Van Reken, (1999)より

8

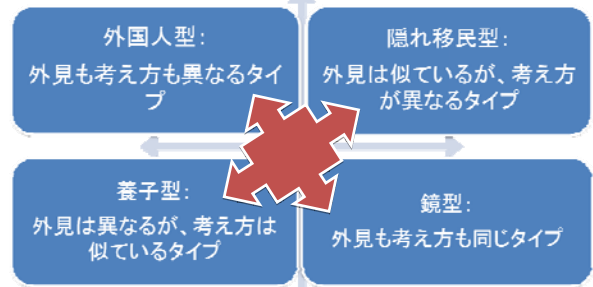
このタイプ分けの意味

- 社会と子ども(自分)の関係は常に変化する。
↓
- 子どもが成長する中で
あるタイプから、あるタイプへ移行したり、
- また場面や人との関係性によって
あるタイプから、あるタイプへ戻ったりする。

9

TCKの4つのタイプ

TCKと自分を取り囲む主流文化との関係性



Pollock & Van Reken, (1999)より

10

TCK研究の主題

- 子どものアイデンティティ形成
 - 主流文化に対する態度形成
 - 主流文化に対する文化的対応
- ↓
- 動態性のアイデンティティ論が中心**
- では、「**ことばの学び**」は？

11

4. TCK研究に欠如した「ことばの視点」

- 複数言語使用と複数言語環境は、
子どものことばの発達と自己形成にどう関わるのか
という視点

12

5. 「移動する子ども」の調査

- インタビュー調査(2008年より)
調査項目: 幼少期の言語使用状況
複数言語環境に対する考え
複数言語学習についての考え
複数言語能力への自己評価
複数言語と自己形成など
調査地: 日本、豪州、タイ、欧州など

13

本講演のテーマ

- (1) 「移動する子どもたち」をどう捉えるか

14

6. 「移動する子どもたち」とは

1. 空間的に移動する子ども
2. 言語間を移動する子ども
3. 言語教育カテゴリ間を移動する子ども

15

「移動する子ども」 (Children Crossing Borders) は何を提起するか

- CCBは、これまでの言語教育のカテゴリ（母語教育、第二言語教育、継承語教育、外国語教育など）を無効にする。
- 新しい「日本人」の定義はCCBに役立たない。
- CCBがどのように複数言語を学ぶのかという視点から考えることが重要

16

2. 本講演のテーマ

- (2) 「移動する子どもたち」の
「ことばの学び」をどう考えるか

17

7. 「移動する子どもたち」の 「ことばの学び」

- 今、ここの議論だけでよいのか。

↓

「移動する子ども」が成長して、大人になると、
どうなるのか。

↓

かつて「移動する子ども」だった大人の調査

18

かつて「移動する子ども」
だった大人へのインタビュー
をまとめ、右の本を出版。
以下、登場する方を紹介
します。



19

華恵さん（エッセイスト）

- 父はアメリカ人、母は日本人。6歳から日本で暮らす。小学校3年生のときに書いた作文で、「全国小・中学校作文コンクール」で賞を取り、その作文を含む著書『小学生日記』を出版。現在、大学1年生。エッセイを多数、出版している。英語と日本語に触れて成長。

20

コウケンテツさん（料理研究家）

- 父は大阪生まれで韓国ソウル育ち。母は韓国済州島出身。大阪生まれ。母も姉も料理研究家。日本語と韓国語に触れて成長。

21

フィフィさん（タレント）

- エジプト生まれ。エジプト人の両親とともに、幼少期に来日。以後、名古屋で過ごす。アラビア語と日本語の中で成長する。

22

一青 妙さん（女優、歯科医師）

- 父は台湾人。母は日本人。東京生まれ。一青は母方の姓。生後から小学校まで台湾で育つ。その後、東京に帰り、日本で成長する。北京語、台湾語、日本語に触れて成長。

23

長谷川アーリアジャスールさん （プロ・サッカー選手）

- 父はイラン人。母は日本人。日本生まれ。小学校のときからサッカー・チームに所属。現在は、横浜・F・マリノスのMFとして活躍している。ペルシャ語と日本語に触れて成長。

24

白倉キッサダーさん（社会人野球）

- タイ北部で生まれる。小学校5年生のときに、タイから日本にやってくる。野球に出会い、中学、高校、大学で投手として活躍する。現在、ホンダ鈴鹿硬式野球部に所属。タイ語と日本語に触れて成長。

25

響彬斗さん、一真さん （大衆芸能演劇人）

- 日系3世。兄は北海道生まれ。弟はブラジル・サンパウロ生まれ。兄弟のふたりは、ブラジルで生活しているときに日本舞踊などを習う。現在、大衆芸能一座を旗揚げし、日本各地、ブラジルなどで公演を続けている。ポルトガル語と日本語に触れて成長。

26

NAM さん（音楽家・ラッパー）

- 神戸生まれ。両親はベトナム出身。両親はベトナム難民として海を渡り、来日した。その経験をラップにして歌い、注目される。ベトナム語と日本語に触れて成長。

27

ケース：セイン カミュ ①

- **アメリカ生まれ。**
- フランス系アメリカ人の父とイギリス人の母
- 母が再婚した相手が日本人。
- **NY、バハマ、レバノン、エジプト、ギリシャなど移動。**

28

セイン カミュ ②

- その後、父親の転勤で、来日。
- 日本の公立小学校1年生へ編入。
- 母語でも文字を覚える時期。
- そのとき、セイン少年は？

29

セイン カミュ ③

- 日本の小学校で、日本語をどう感じ、どう習得していったのか？

30

セイン カミュ ④

- ・小学校4年生のとき、シンガポールへ移動。
- ・インターナショナル校へ。
- ・中学で、日本に移動。
- ・横浜のインターナショナル校で中学、高校。
- ・高校卒業後、祖国アメリカの大学へ。

31

この調査から見えること

- ・調査協力者は、マルチリンガルなCCB
ただし、
- ・常に不安感を秘めた言語能力意識
- ・この「不安感を秘めた言語能力意識」こそ
CCBの言語習得や言語生活を下支えしている

32

8. 「移動する子ども」だった学生の語りから日本語教育を考える

川上・尾関・太田 2011

<来日前>

- ・幼少期より複数言語環境で成長する。
- ・日本語能力に自信があるわけではない。
- ・その気持ちが日本語学習や自分自身の捉え方へ影響

33

<日本の大学における、自分のポジショニング>

- ・「海外にいる日本人」として認めてほしい。
 - ・自分自身の「位置」を考える。
 - ・自分自身を振り返る。
- ↓
- ・日本語学習の目標や意味が変わる。
 - ・大学の内外で日本語を学習
- ⇒「日本語との距離感」が変化する。

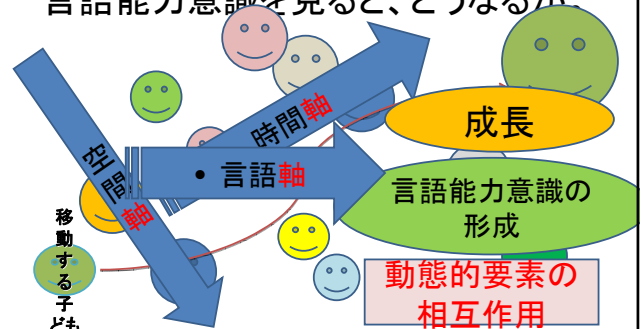
34

川上・尾関・太田(2011)から

- ・日本語能力意識が、日本語学習を通じて新しい「日本語との距離感」を生む。
- ・それが生き方へ影響する。
- ・「移動する子ども」はその成長の時間軸にそって自らが納得する「日本語とのつきあい方」を見つける作業を、日本語学習を通じて行っている。
- ・⇒これからの日本語教育は、単なる言葉の教育から生き方につながる言語教育をめざす必要がある。

35

「移動」を視点に 言語能力意識を見ると、どうなるか



36

2. 本講演のテーマ

(3)「移動する子どもたち」の
「ことばの教育」をどう考えるか

37

9. 「移動する子どもたち」の 「ことばの教育」

教育実践者の視点、「子どもの捉え方」あるいは「ことばの力」についての認識こそ、重要。

Cf. 欧州評議会 (Council of Europe)
「ヨーロッパ言語共通参照枠」(CEFR)
言語教育が育成する言語熟達度の客観的基準

38

「移動する子どもたち」の 「ことばの教育」

学習者である子どもの**動態性**
教育実践者の**動態性**
↓
必然的に、
実践自体が**動態性**をもつ

39

「移動する子どもたち」の 「ことばの教育」

子どもと実践者の**関係性**は、
子どもを「主体として受け止めて主体として育てる」という大人と、
「主体として受け止められて主体として育っていく」という子ども側の「**相互主体的な関係性**」(鯨岡、2006)

40

「移動する子どもたち」の 「ことばの教育」

「**関係性こそ、ことばの力=リテラシー**」

他者がいることで成り立つ「ことばの力」という意味で、「**相互構成的関係性**」

ともに実践をつくっていくという意味で
子どもと実践者との「**相互構築的関係性**」

41

10. 結論

1. 子どもは**社会的な関係性**の中で言語を習得する。
2. 子どもは**主体的な学び**の中で言語を習得する。
3. 複数言語能力および複数言語使用についての**意識は成長過程によって変化する**。
4. 成人するにつれて、**言語意識と向き合うこと**が自分自身と向き合うことになり、その後の生活設計に影響する。
5. ただし、言語能力についての**不安感**は場面に応じて継続的に出現する。

42

まとめると・・・

- CCBは、既成の記述的な言語能力や言語教育のカテゴリーとは別次元で、極めて**主観的な意識のレベル**で言語習得や言語能力意識を形成し、そのことに主体的に向き合い、折り合いをつけることによって自己形成し、自分の生き方を立ち上げていく

43

「移動する子どもたち」の「ことばの教育」

CCBを対象にした教育実践は、日本語母語話者をモデルとしたあらかじめ決まった目標に到達する言語教育ではない。

44

「移動する子どもたち」の「ことばの教育」

CCBの**主体的な、そして主観的な言語能力意識**が、言語学習や言語使用、そして生き方へも影響を与える。

⇒CCBに向き合う教育実践は、**動態性**の子どもと、**動態性**の教育実践者の双方の**主体性育成**をめざす教育実践

45

グループ・ディスカッション

保護者の方は、ご自身のお子さんを、

先生はご自身の教えている子どもを、

思い浮かべながら、次の質問についてお考えください。

46

グループ・ディスカッション

1. 子どもが日本語を学ぶとき、どのような学び方が好きですか。
2. 子どもは、どのような時に、一番、日本語を使いますか。
3. 子どもは、自分の日本語の力をどのように考えていると思いますか。

47

グループ・ディスカッション

1. 子どもが日本語を学ぶとき、どのような学び方が好きですか。
→ **主体的な学び**
2. 子どもは、どのような時に、一番、日本語を使いますか。
→ **主体的な生き方**
3. 子どもは、自分の日本語の力をどのように考えていると思いますか。
→ **主観的意識**

48

「移動する子どもたち」に 必要なのは？

主体的、かつ主観的なことばの使用を学ぶこと



子ども自身が
複数のことばの資本を
編成的に再構成し、
自分の生き方を考える
教育実践

49

ご質問、ご議論、
ありがとうございました。

川上郁雄
kawakami@waseda.jp

50

主な参考文献

- 川上郁雄・石井恵理子・池上摩希子・齋藤ひろみ・野山広編(2009)『「移動する子どもたち」の教育を創造する—ESL教育とJSL教育の共振—』ココ出版
- 川上郁雄・尾関史・太田裕子(2011)『「移動する子どもたち」は大学で日本語をどのように学んでいるのか—複数言語環境で成長した留学生・大学生の日本語ライフストーリーをもとに—』『早稲田教育評論』第25巻、第1号、早稲田大学教育総合研究所、pp.57-69
- 片岡裕子(2008)『アメリカにいる日本の子どもたち』、佐藤都衛・片岡裕子編『アメリカで育つ日本の子どもたち—バイリンガルの光と影』所収、明石書店、pp.48-67
- 佐々木倫子・細川英雄・砂川裕一・川上郁雄・門倉正美・性川波都季編(2007)『変貌する言語教育—多言語・多文化社会のリテラシーとは何か』くろしお出版
- 佐藤都衛(2008)『第三の文化』をもつ子どもの育成に向けて—子どもたちをいかに支えるか』佐藤都衛・片岡裕子編(2008)『アメリカで育つ日本の子どもたち—バイリンガルの光と影』所収、明石書店、pp.218-228.
- Castles, S. & Miller, M.J. (2009). *The Age of Migration: International Population Movements in the Modern World*. (Fourth Ed.) London: Palgrave Macmillan
- Pollock, D.C. & Van Reken, R.E. (1999) *The Third Culture Kid Experience—Growing up Among Worlds*. Maine: intercultural Press.

51

「移動する子ども」シリーズ①

- 川上郁雄編

『**移動する子どもたち**』と日本語教育—日本語を母語としない子どもたちの**ことばの教育**を考える—』
(明石書店、2006)

『**移動する子どもたち**』の考える力とリテラシー—**主体性**の年少者日本語教育学—』
(明石書店、2009)

『海の向こうの**移動する子どもたち**』と日本語教育—**動態性**の年少者日本語教育学—』
(明石書店、2009)

「移動する子ども」シリーズ②

- 川上郁雄編

『**私も「移動する子ども」だった**—異なる言語の間で育った子どもたちのライフストーリー—』
(2010、くろしお出版)

- 川上郁雄

『**移動する子どもたち**』の**ことばの教育学**』
(2011、くろしお出版)

53